

---

ポスター | 1-12 自律神経・神経体液因子・心肺機能

## ポスター

### 自律神経・神経体液因子・心肺機能

座長:馬場 礼三(あいち小児保健医療総合センター)

Fri. Jul 17, 2015 1:50 PM - 2:32 PM ポスター会場 (1F オリオン A+B)

II-P-094~II-P-100

所属正式名称:馬場礼三(あいち小児保健医療総合センター 循環器科)

---

#### [II-P-097]小児心臓病におけるトロポニン Tの意義

○中嶋 八隅, 森 善樹, 金子 幸栄, 井上 奈緒, 村上 知隆(聖隷浜松病院 小児循環器科)

Keywords:トロポニンT, 予後予測, 小児心不全

心筋トロポニンは成人心不全診療において、BNP、NT-Pro BNPに次ぐバイオマーカーとされ、リスクの階層化、予後予測に有用とされている。しかし小児領域ではその意義は定まっていない。

【目的】小児期心疾患での心筋トロポニン T (TnT) 値と、予後との関連を検討する。

【対象と方法】2012-2014年に TnTを測定した20歳以下の症例を後方視的に調査した。その中で A群:右心系負荷疾患として心房中隔欠損症 (ASD)、Ebstein奇形、B群:左心系負荷疾患として心室中隔欠損症 (VSD)、動脈管開存症(PDA)、C群:チアノーゼ心疾患としてファロー四徴症 (TF)、D群:心筋症・心筋炎後症例を抽出し、TnT値をコントロールと比較し、左右短絡疾患では、TnT値と肺体血流比 (Qp/Qs)、左右心室圧比 (RVP/LVP)との相関をみた。また予後(経過中の死亡)との関係を検討した。コントロールは心疾患、肺高血圧症、不整脈、川崎病を除外した症例とした。

【結果】該当症例は110名で、A群32名、B群30名、C群19名、D群22名、コントロール7名だった。それぞれの TnT値(ng/ml)は、 $0.004 \pm 0.003$ 、 $0.014 \pm 0.003$ 、 $0.011 \pm 0.008$ 、 $0.015 \pm 0.023$ で、A群、B群ではコントロール ( $0.002 \pm 0.001$ ) と有意差がなく、C群、D群で有意に高かった( $p < 0.01$ )。A群、B群では TnTは Qp/Qsとは相関がなかったが、RVP/LVPとよい相関を認めた(A群  $r = 0.52$ ,  $p < 0.001$ , B群  $r = 0.86$ ,  $p < 0.01$ )。経過中、9名が死亡し、死亡例の TnTは  $0.036 \pm 0.026$  で、生存例より有意に高値だった( $0.013 \pm 0.063$ )。TnTカットオフ値0.015で感度78%、特異度79%だった。

【結語】小児心疾患においても TnTは心負荷所見をみる良い指標で、左-右短絡疾患では容量負荷より右室圧負荷によって高値をとった。その他、チアノーゼ、心筋自体の障害で上昇することが示唆された。また TnTは小児心疾患の予後を予測する指標である可能性がある。